

障がいに対する理解を深める研修・啓発活動講師団 ニュース

～障がいの有無にかかわらず、お互いに認め合い、思いやり、支え合う社会をつくるために～

No.13 2016.8.12

平成 28 年 6 月 23 日（金）に、市人権同和教育啓発課が主催する「身近な人権講座」で障害者差別解消法・ともに生きる条例について講義を行いました。約 65 人の方に参加していただきました。

研修の流れ

① 障害者差別解消法・ともに生きる条例の概要等

障害福祉課職員から、障害者差別解消法・ともに生きる条例の成り立ち、内容等について説明を行いました。

② 障がいのある人が置かれている状況

講師団講師から、それぞれの置かれている状況や体験などを話しました。（内容は裏面に記載）



研修参加者の声

参加した市民からいただいた声をご紹介します。

- 障がいのある人の生の声を聞くことができ大変勉強になりました。当事者のお話だったので、とても説得力があり、今後の活動にすぐに役立てたいと思いました。
- 白杖を上げる仕草が視覚障がいのある人の助けを求めるサインだと初めて知りました。
- 精神障がいについては、知識のなさや逆に偏った知識、偏見などにより、怖いと感じている人が多いと思います。そういう人の雰囲気を感じ取り、疎外感を感じるのだと思いました。車いすに乗っている、杖をついている、自分らと違う様子であるだけで、どう接したらいいかわからない人が多いことも話を聞いてよく分かりました。
- 有意義な研修でした。知らないことも多い私ですが、これからも前向きにがんばっていきたくと思いました。



と も に 生 き る 条 例



発行：別府市福祉保健部障害福祉課

〒874-8511 別府市上野口町 1 番 15 号

TEL：0977-21-1413 FAX：0977-22-1780

E-mail：haw-hw@city.beppu.oita.jp

市ホームページ URL：http://www.city.beppu.oita.jp



大久保 多津子 さん
(聴覚障がい・知的障がいの
ある人の保護者)

平成 18 年に NPO 法人は
つぴいを設立し、就労継続支援
B 型「はつぴい作業所」や授産品
などを販売する「サロンはつぴい」
などの運営を行っている。

自分には、今年 32 歳になる知的障がい・聴覚障がいの重複障がいのある息子がいる。聴覚障がいの 2 級で耳がほとんど聞こえないので、言葉を話したり、理解するということがなかなか難しい。

大人になると、外に一人で出かけて行って店などに立ち寄るようになったが、周りからは「怪しい」「怖い」とみられるようで、すぐに警察を呼ばれる。そして、警察官に、色々と言教をされる。警察官は、「この人（子ども）の安全のためや」などというが、では、障がいのある人は家に閉じ込めておけというのか。それが、果たして本人のためになるのか、と思う。

近年、法の整備や啓発活動などが盛んになって、前よりも環境が良くなった気はする。世の中にはこういう人がいるんだと分かってくれるようになったと思う。

地域の方には、その地域に障がいのある人がいる場合は、積極的に関わろうとしないでもいいので、見守りをしていただければうれしい。



川野 陽子 さん
(肢体不自由)

1 歳時に難病のウェルドニ
ッヒ・ホフマン病と診断され
る。西別府病院に入院しながら
県立石垣原養護学校に入学。
以後中学部、高等部と進学。
アマチュア漫才をしたり、エ
ッセイを出版したりと精力的
に活動。

現在は、NPO 法人あっと
むぶれいすでコーディネー
ターとして活動している。

○ 病気と現在の状態

自分は、全身の筋力が低下していくという進行性の病気で、治療法はないが、注射や薬で進行を遅らせている。今自分で自由に動かせるのが右手の先だけだが、右手の先で電動車いすを捜査して色んなところに移動している。

○ 職業

NPO 法人あっとほうむぶれいすのコーディネーターとして、施設や親元ではなかなか社会参加ができない人のイベントの参加支援や、障がいがあると色んな悩みや思いを抱えている人がいるが、それを聞くピアカウンセリングをしている。

○ 幼少期～

病気が分かったのは 1 歳のとき。小学校 1 年生の年から、実家の中津を離れて西別府病院に入院しながら、併設されている養護学校に通い始めた。小中高と養護学校に通い、20 歳になったときに、西別府病院を退院して実家の中津に帰って、短大に通うことにした。

○ 短大生活

自分が通った短大は、車いすの学生は初めてだったため、大学側は何度も会議を開いて、必要な配慮を考えてくれた。その結果、入口にスロープをつけたり、休憩用のベッドを設置したりしてくれた。ただ、大学にはエレベーターがなかったため、毎日誰かに階段を抱えてもらって上り下りする必要があった。最初はだれも助けてくれなかったが、こちらから「おはよう」「手伝って」と声をかけるようにしたら、自然と手伝ってくれるようになった。友達は、声をかけてくれたりして支えになってくれた。

○ 伝えたいこと

短大時代は、友達の声かけやあいさつで助けられた。地域でも、皆さんに声かけ・あいさつしてもらえるだけで、私たちは十分元気をもらえる。

また、私たちは、サポートを受けているばかりでなく、地域での役割を果たしたいと思っている。ぜひ声をかけていただければと思う。